

その願いの行き着く先
は

ゲストU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少女が魔法と出会った

願望器の宝石をめぐる戦いの中で

一つの家族にたどり着く

目次

出会い、始まり	1
初陣、説明と意思表示	11
プール	20
到着 時空管理局	28
それぞれの抱える物	36
氷と星と雷と	42
CROSS OVER THE WOR	
LD	49
Frost Blaze	64
前に進むために	72
願いの先に	88

出会い、始まり

この広い空の下には

様々な人、生き物がいて

そのうちの出会いのいくつかには

幸と不幸があつて

出会いがあり、別れがある

失いたくないと願った少年。

その願いのいきつく先には

—— 幸せな結末なんてあるわけが無かつた

『お前は こんな所にいちやいけない』

『帰るんだ…自分の居場所に…!』

夜の公園だろうか 一人の少年が立っていた

民族衣装のようなものを身につけていた

だがその姿はボロボロの状態だった

『妙なる響き光となれ 許されざる者を封印の輪に…!』

『stand by sealing』

『ジュエルシード封印!!』

丸い魔法陣が展開されそこに黒い靄のような何かが激突する

耐えられなかったのか吹き飛ばされる少年

動けなくなったのかその体は光だし——

—————

「どうしょ…」

「どうかしたの？」

聞かれてしまったので変に誤魔化さずついさつき見た夢について話した

「確実にそれだよね」

「()管理外世界だよね…」

()は第97管理外世界

魔法がない世界

管理外世界には基本的に魔法文化はない

逆にある世界は管理世界と呼ばれている

それを定めた時空管理局という組織に俺は一応所属している

年齢1桁でも働けるあたり人手不足にも程があるけど贅沢は言ってられないのだ

「それで、これからどうするの？」

「話を聞く為にあの男の子探す」

「そう、気をつけてね」

「大丈夫だよニクス」

これでも、時空管理局囑託魔導師だからね
とだけ返し学校へ

本当なら学校なんて行く必要は無いのだが最低限勉強はしておけとの事で義務教育は受けることになってる

距離があるのでバスで向かうのだが

「あつ、悠君おはよー！」

「おはよう悠君」

「悠おはよう」

「おはよう3人とも」

これもいつもの事だ

上から

高町なのは

月村すずか

アリサ・バニングス

数少ない友人と言うかその三人しかいない気がする

放課後になり早速夢で見たあの場所へ行ってみることにした

夢で見たとおりボロボロで見ても無残な状態で警察がいたが経年劣化で片づけられるだろう

『助けて……』

念話だしかも全方位無差別に放っているのか？

魔法の素質がある人には聞こえるだろうがそんな人はそう簡単には見つからないだろう

声のした方に向かって行ったがなんといつもの三人娘がいやがった

それなりに深いところだった為偶然はないだろう

あの三人の誰かに、魔法の素質があるかも知れない

その後動物病院に向かって行ったため今日の夜にでも行ってみようと思う

「言うわけで今から動物病院にアニスを連れて突撃しよう思うんだけどどうかな？」

「ダメって言うても行くくせに……」

まあそこら辺のロストログアや魔導師がそう簡単にベルカの騎士に勝てるわけない
し

「アニスーいくよ！」

『聞こえますか…？ 僕の声が…聞こえますか…？』

動物病院に行こうとした時のことだった

「野郎また無差別に念話を…」

「また？」

放課後にも無差別念話があったことを話した

「念話の内容からしても時間が無いかもね…」

「そうだな、行ってきます」

「いってらっしゃい」

結界が張られたのかほかの人の気配が消える

よく知っている、ミッドチルダの魔法
ますますめんどくさいことになってきやがったぞ

「さあ、戦闘開始だ。セリオン、セットアップ！」

掛け声と共に騎士服を生成する

黒のズボンに同色のインナー白のフーデッドケープ

両腕、脚、胸に装甲がありその手には漆黒の槍

暗闇ではなかなか目立たない感じだがこれはこれで丁度いい

「さーてと 諸悪の根源はどこかなって」

結界内で爆発音：ではないな

何かを破壊する音を頼りに探す

「あれは…!?!」

見つけた

夢で見た黒い霧

昼間彼女らが運んでいった小動物

そして…

「お前だったのか…」

高町なのは

「急がなきゃ」

魔法がバレるとかそんな事言ってる余裕はない

「アニス、防御を 彼女らを守るんだ」

「了解したよ」

「いくぞ…！」

訳が分からなかった

頭に響く声を頼りに動物病院に来て

モヤミたいなのに襲われて、必死に逃げていた時

突然キツネみたいな動物が現れて…

目の前には魔法陣みたいなのがあつて

「よお、こんな所でどうしたの？」

黒い服に身を包んだ、クラスメイトの悠君がいた

間に合つたな

「ま、魔道士!？」

コイツこつち側か小動物の癖に

「時空管理局嘱託魔道士　ハルカ・テスタロツサだ。この状況、後で詳しく聞かせてもらうからね」

「は、悠君……」

「話はあとだよ高町さん」

障壁にあたつて怯んでいた靄に向き直る

「さつさと逃げてくれるかな？ 守りながらじゃ戦えない」

3つを同時に相手は流石にきついんだけどなあ

それにしても後ろの2人（2人？）が動く気配がない

「ちよつと何やつてるのさっさと逃げろ！」

そう言つて振り向いた瞬間

桃色の魔力で目の前がピンクに染まつた

初陣、説明と意思表示

なんだこの馬鹿げた魔力は!?

視界が桜色に染まった時考えたのはそれだった

「なんて…魔力……」

小動物がなんか言ってるやがる

「おい小動物!お前は一体何をした!」

「悠!アレが持ってたデバイスがマスター認証してあの子をマスターと認めた!」
はあ!?

この場にいるのは

小動物 俺 アニス 高町なのは

だけだったはずだ

高町なのはの姿が上空にあるのとその周りを魔法陣が囲っているなのであの魔力は高町なのはによるものだと判明した

「冗談だろ…」

まさか生粋の管理外世界の住民にこれほどの魔力があるなんて誰が予想できるだろうか

そして次々に展開されていく杖

そしてその姿は小学校の制服を連想させそうなバリアジャケットに変わっていった

「成功だ……!」

あの小動物よりによって魔法と無関係な管理外世界の一般人しかも年齢2桁も行かない女の子巻き込みやがったな

「後で話聞かせてもらおうからな……」

誰に言うでもなくそう呟いた

「え……ええええええええっ!」

あの魔力に反応したのか 黒い靄は高町さんに狙いを定めたみたいだ

「早く後ろに跳べ!」

咄嗟なのか声が聞こえたのかは分からないけれど 後ろに跳んだ……いや飛んでいる

高町さん

「え——っ!？」

懐かしいなー

初めて飛んだ時ってこんな感じだったのかなーなんて思いつつ同じ高さまで飛び話しかける

「驚くのは分かるけど一旦落ち着いたら？」

「だってだって私今空飛んで…ええ!?!悠君も飛んでる!？」

「こうなった以上協力してもらいます。高町さん、大丈夫必要な事はきつとその杖が教えてくれるはずだからとりあえず逃げ回って」

そう言つて構える

黒い靄が眼前に迫っているからだ

障壁を張り突進を防ぐ

そのあいだに飛び回り魔法についていろいろ聞いているだろう

運がいいのか悪いのか小動物の近くに降り突進してきた靄を受け止め一撃加えたの

だが三つに別れそれぞれが早々を凶つたのだ

「まずい…逃げる！」

「追いかけてなくちや！」

ここで重大な問題が発生した

逃げ足が早く追いつけない

「セリオン、シユートフォーム」

『shoot form』

砲撃用の形態に 切り替え同じ考えだったのか高町さんのデバイスが音叉のような形に変化した

この人砲撃魔道士か

そんなこんなで封印と回収に成功したわけなのだが問題はここからだった

多分僕はアニメ的というと怒りマークが出ていそうな状態だっただろう
ところ変わって僕の家

今に3人？いるが

アニスは眠ってしまったしニクスはそもそもこの場にいらない

「で、まずこちらの質問の前に…なにか聞きたい事は？」

とりあえず質問を投げかけてみる

『あの…ここは管理外世界のはずです。なのに何故あなたのような魔道士がいるんですか？』

最初に口を開いたのは小動物だった

当然だろう。管理外世界には魔法なんてない

それなのに俺のような魔道士に出会ったんだから

「親の方針でこの世界で暮らしているんだ。義務教育が終わるまではここにいてもいいけど、他には？」

「あの一…さつきから出てる管理外世界とか魔道士っていうのは…」

「この質問も当然といえば当然だ」

「それに関してはこれから説明するよ。こうして関わってしまった以上最低限知っておいただ方がいいからね」

そして説明はめんどくさかったけどちゃんとやった

時空管理局という組織のこと

ここが管理外世界と呼ばれる世界だということ

そして魔法のこと、全てだ

そして小動物の説明もしてもらった

名前はユーノ・スクライア

遺跡発掘などを生業としている一族である宝石：ロストロギア ジュエルシードは彼が発掘を指揮していたらしい

それを運んでいる途中自己でこの世界に落としてしまった。

そして発掘者として責任を感じてこの世界にやってきたとの事だ

全部で21個あるロストロギア

回収できたのは今のところ四つ

二個目で救援要請

「ここから導き出される答えは

「馬鹿じゃねえの」

『いきなり何言うんですか!』

「そう言うのは素晴らしいと思うけど同時に無謀だよ。二個目で無差別念話で助け求めてたくせに」

『でも…ジュエルシードは僕が発掘したから…』

「オーケーこの件はまた後でだ」

「それで高町さん? 以上のことを踏まえて君には選択肢がある」

「選択肢?」

「そう、このまま魔法のことを忘れて生きるか、魔法という存在を受け入れるか」

正直な話忘れてもらった方がありがたいがたいんだよなーめんどくさいし

しかし彼女は関わった以上手伝いたいと言いつ出したのだ

「分かった。」

「いいの! ありが「ただし」?」

「ジュエルシードを探す時は俺と行動すること」
「なんで？」

俺との 行動を条件に出したのは戦力の問題だからだ
リンカーコアが弱りまともに戦えないユーノ

魔法初心者の高町なのは

この2人だけだったら色々大変そうだし。それにこちらには

時空管理局嘱託魔道士としてそこそこ経験のある俺

使い魔のアニス そしていつから持っていたのかわからない大容量ストレージデバ

イス氷華の書がある

戦力としては過剰レベルだが充分なのだ

何かを守る護りながらも戦える

そんな考えもある

納得はしてくれた

一応話し合った結果ユーノは高町家で預かることになった

高町さんを家に送る途中

「くれぐれも魔法のことは喋らないでくれよ？」

「大丈夫だつて」

「これから一緒に行動する事は多くなるだろうけど練習とかは付き合うつもり」
「分かったの」

今回の件

管理局にはいつてない

言ったところですぐ来れるわけでもないのだから前かつ被害を出さないようにさつ
さと集めなければならぬ

「さあ……これからどうなるかな……」

プール

クラスメイトの衝撃的な魔導師デビューから一夜明けた
急激な変化だ何か異常があつてはいけないと思うがいつも通りの態度で友人と接し
ていた

なにあの鋼のメンタル

授業中下を向いていたりしていた為恐らく念話をしているのだろう

それでいいのか小学生

立場的には俺も同じだけ

放課後にはまたジュエルシード探しなんだが大丈夫何だろうか

ジュエルシードは現在合計四つ

残り最大17個

ユーノの証言から考えたが恐らくだが事故じゃない

ロストロギアを運ぶのだから次元震にも耐えられるはず

しかしそれは今考えることではないのだ

さあ問題発生だ

俺は今プールに誘われている

何故だ

別に行くのは構わないんだよ？

「しっかしなあ…」

「だめ…かな？」

「メンバー女の人ばかりじゃんか」

「ユーノ君もいるよ？」

「ユーノだけじゃないか」

そう、女の人ばかりなのだ

ちなみにメンバーはと言うと

なのは アリサ すすか なのはの姉 すすかの姉 すすかの家のメイド二人

見事に全員女である

「まあ…行くのは構わないよ」

「ほんと！」

『ねえ悠』

『言うなユーノ 何も言うな』

『早く泳ごーよー』

『泳ぎたいなら桶にでも入ってなさいアニス』

そんなこんなで当日

アニスを連れてプールに来た

まあプールサイドにいるんだわ

誰と遊ぶわけでもなく

「泳がないの？」

「いーの泳がなくて」

「所で悠」

「なにかなバニングスさん」

「アンタとなのはっていつからそんなに仲いいのよ」

「ふえっ!?!」

「え?」

なんて言った今仲がいい?俺と?高町さんが?まさか

「なんでそう思うの?」

「だってほら、ユーノのこと預かった時くらいからなのはとよく話してるじゃない」
「月村さんはそこんどこどう思う?」

「私もそう思うかな」

「じゃあ仲がいいかは別として話すようになった経緯は話すよ」

『ええ!?!ちよつと待ってよ!?!』

『お黙りユーノ、魔法のこと話すわけないだろうが管理局員だぞ』

説明を誤魔化しながらするのは割と得意なほうだ

簡潔に説明するならこうだ

夜中に散歩していたら轟音が聞こえた。それに驚き行ってみると事故が起きていてそこで偶然高町さんに出会った

「という訳」

「ちよつと待つて、あの事故つて夜に起きたのよね？」

「それが？」

「何であんたはそんな時間に散歩なんてしてるのよ」

「鍛えてるからクールダウンの意味も込めて散歩してるんだよ」

『よくそんなことがスラスラと…』

『こういうのは得意だし事実だからな』

『魔力の残滓があるからジュエルシードがあるかもしれないんだけど』

『そうか、ちよつと探してくるか？アニス』

『ユーノと一緒に行くよ』

『頼む』

ジュエルシードってこんな所まで転がってるのかよ

封印処理は出来るから問題ないんだけど

『あー、なのは？』

『なに？悠君。』

『ジュエルシードがここに転がってるかもしれないから注意しといてねってだけ』

『ええ!?!こんな所にも!?!』

『まあ発動するまでは安心していいよ。発動しても俺が封印するから』

『分かったの…』

もうすぐ発動するかもとは言わない

その直後広域結界が展開された

「来たー！」

『悠！何人が取り残されてる人がいる！』

「なんだって!？」

その直後、悲鳴

見るとバニングスさんと月村さんが捕まっていた

「あれは…服…というか水着を脱がしてる？となるときっかけは更衣室荒らしか？」

そこまで考えていると2人が水着を脱がされてプールに放り出されていた

なんか文句言ってる

「全くしようがない、なっ！」

『Gefrorrene Kugel』

すかさず凍結効果のある弾丸を放ち水を止める

デバイスなしだとあまり制御が上手くないからこうゆう場合は楽だ

あの二人からしたらいきなり水が凍ったと感じただろう

その後ユーノが二人を眠らせたため気のせいだとも思うだろう

その後分裂していたジュエルシードの反応はまとめて封印された

魔法に触れてそこまで経っていないのに収束系の上位魔法まで使えるようになって

いるなんて恐ろしい才能だとは思う

その日は2人が目を覚ましたあと何事もなかったかのように装ってそのまま解散となった

とあるビルの屋上

「第97管理外世界…現地名称…地球」

「母さんの捜し物……ジュエルシードはここにある……」
『Yes, sir.』

到着 時空管理局

あの後ジュエルシードは2つほど発動したようだった

2つのうち1つは俺もいたが

ひとつはなのはが封印をしようとしたが他にも魔導師がいたらしい

その魔導師と接触したのは数日前の夜

ジュエルシードを巡ってなのはと争うのを遠くから映像に残していた

金髪の魔導師は対人慣れしているのかなのはより強かった

そして事件は起きた

封印が甘かったのか戦いの最中ジュエルシードを回収しようとした時デバイスがぶ

つかり合い再び発動したのだ

その際デバイスは双方破損

直ぐに近くにいき封印したままでは良かった

「あなたはあの子の仲間？」

「そうだ。ジュエルシードを封印するために動いてる」

「あまりやりたくはないんだけどやっとなきなや怒られるし」

「時空管理局嘱託魔導師 悠…」

「このおおお！」

「危なっ!？」

「ジュエルシード回収! 逃げるよフェイト！」

「あ、うん…」

「え!? あ、落とした!？」

「悠!?! 何してるの!？」

「あー……逃げたか、まあいいや」

「良くないよ!」

特に気にした様子はないし気にする必要も無いのだが良くない方向に向かって行っ
た

「…送信つと」

なのはらと別れたあと悠は写真付きでメールを送っていた

内容はもちろんあのフェイトとかいう魔導師のこと

「(ジュエルシードのことは一応ルークさんに報告済みだし今回は次元震も起きた。管理局が動かないはずがない)」

一応報告はこまめにしていたのだ。なので一般人のなのが巻き込まれた事も言っている

あくまでルーク個人宛のため話が伝わっているかは別なのだ

「ん？返信が来た？」

基本的送るだけで返信なんて大して来なかったから珍しいのだ

『時は来た』

「っ！」

「みんな どう？今回の旅は順調」

ここは時空管理局 L級次元巡航船 アースラ

先日起きた次元震の調査のために地球に向かっている途中だ

「はい、予定に遅れありません」

「事件の中心人物と思われる二名の魔導師も現在は活動を停止しているようです」
「そうね……ちよつと厄介なものね」

アースラ艦長 リンディ・ハラオウンはあることを思い出した

「そう言えば、悠君も地球にいたわね。彼からの連絡はあつたのかしら？ ルーク執務官？」

「……………」

ルークと呼ばれた彼はモニターを見てずっと黙っていた

なにか考え事をしていたように

「ルークさん？」

「……えっ？ あつ、なんですか？」

「悠君からなにか連絡はありませんでしたか？」

「ああ、そうですね。」

ルークは悠から来ていた連絡について話した

ロストログアが事故で地球の海鳴に散らばったこと

一般人が巻き込まれ、偶然にも魔導師としてとてつもない才能があつたこと

ミッドチルダから来ただろう魔導師が現れたこと

次元震の影響でデバイスが両者破損したこと

「それ、もつと早く言ってくれても良かったんじゃないかしら？」

「早く報告したところで早く行けるわけでもないのに？」

「それはそうだけど…まあ管理外世界の小規模なものとはいえ…次元震の発生は見過ごせないわ」

「大丈夫…分かっていますよ艦長。迅速に解決しましょう」

「リンデイさん。時は来た」

「!？」

時は来た

たったそれだけ、それだけでここにいる人物はんのか理解することが出来た
ずっと彼が話していたこと

家族の手がかりが見つかったらそれを追うため管理局を抜ける

その時には追跡しないで欲しい

というものだ

「(あのフェイトとか言う魔導師…あまりにも似すぎている…)」

思い浮かぶのはかつての姉の姿

今は亡き優しい姉と母とすごした微かな思い出

「(もう…絶対逃がさない…)」

両者のデバイスが修復された

そしてまた、ジュエルシードが動き出す

「(時は来た　それが意味することはただ一つ　この事件、動くぞ)」

そして二人の魔導師がぶつかり合おうとしたその時だった

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ」

来た、管理局到着。クロノがいるってことはつまり

『今だ、やれ悠』

やっぱり、ルークさんだ

「ごめん、なのは」

「え？」

『ice stinging』

氷の槍を槍状に形成し飛ばす魔法

ルークさんから蒐集した結果使えるようになった魔法だ

それをフェイトに当たらないように放つ

もちろんなのはとクロノを巻き込む形で

「悠っ！いきなり何するんだ！」

「……」

そんなことを聞いたところで答えない

そうなることを分かかっていてルークはこうすることを確認していた

「時が来たんだよクロノ君」

「ルークさん……」

「さあ、撤退だ！フェイトとかいうのとその使い魔、ジュエルシードを持ってずらかるぞ
！」

「OK！一応多重転移で撤退する！」

すかさずルークはフェイトとその使い魔

悠はジュエルシードを持って多重転移を使いその場から消えた

そこに残されたのは攻撃を受けただろう魔導師達

目くらしまし目的だったため外傷はなかった

「なんで…悠君…」

「艦長…残った魔導師をアースラに連れていきます」

『ええ、お願いね。』

それぞれの抱える物

「なあ…あんたらはなんであたしらを助けてくれたんだい？」

警戒の色を残しつつもアルフが聞いてくる

「んー俺にはなんとも言えないかな。ルークさんの指示だし」

「ルークって…あいつかい？」

「ああ、そうだ」

特に関心を示していない様子で答える

「さて、今からお前らに少々質問させてもらおう」

「それは管理局の「違う」」

アルフの言葉に被せて言葉を中断させる

「お前らを助けた時点で俺達は管理局の人間ではない」

「それって…」

「説明は後だ、質問するから答えろ」

「は、はい…」

正直……までの威圧感は今までこの人から感じたことがない。視線がフエイトに向

いているのでちょっと怯えている様子だ

「プレシア・テストアロッサについて知っているな？居場所を吐け」
「え？」

「プレシア・テストアロッサの居場所を吐け あるいは案内しろ」
いきなりそんな事言われても答えるわけ…

「分かりました…」

あれー？あつさりOKしちゃってるけど？

そんなに怖いかな？あ、怖いわ正直俺も怖い

「座標だけ教えてくれればそれでいい」

「ここが時の庭園…か」

転移直後にアラートが鳴り響いた

「あちやー侵入者用のアラートかあ」

すると傀儡兵が転送されてきた

「行くぞ バルディネット」

『Yes sir』

突然送られてきた元ストレージデバイスの愛機は機械音とともにスフィアを展開した

時の庭園最深部

侵入者を示すアラートが鳴り響く中一人の女性 プレシア・テスタロッサが椅子に座っていた

「ここはフェイト以外には教えていなかったはずだけど…一体どこのネズミが入り込んだか…っ!？」

モニターを開き侵入者を視認した時同様が見られた

『邪魔だアアアアア!!!』

『Scythe slash』

斧のようなデバイスから紫色の魔力刃が展開され機械兵を切り裂き突き進んでいる姿がモニターに映し出されていた

「まさか……！」

そうしている間にも侵入者——ルークは突き進んでくる
そしてとうとう最深部へと到達してきた

「轟け！轟雷！」

『thunder smasher』

自身と同じ色 変換資質の紫電が扉を破壊した

「やっぱり……あなたは……」

「ご明察、久しぶりだね……20数年振り位かな母さん」

『あの……フェイト……ちゃん？』

『フェイト・テスタロッサ』

『え…?』

『テストロッサだと…!?』

『なにか?』

『いや…なんでもない…』

それが最後にしたやり取りだった

「悠君はどうなるんでしょうか…?」

「そうね、これからやることは分からないけれど確実に公務執行妨害になるから拘束は免れないんだけど」

「そんな…」

「ああ、大丈夫よなのはさん。そこまで深刻なことにはならないから」

良かった そう思うも続く言葉に耳を傾ける

「ただ…悠君はルークさんに依存している節があるの…」

「依存ですか?」

「ええ、基本的にルークさんの言うことには逆らわないしそんな場面見たことない」

「自立しているようで、しっかりしてるようでその精神はとても脆いの…」

「だからなのはさん」

「はい」

「あの子のこと…よろしくお願いね？」

「はい！」

そう、いつだってそうだ

必要なことは最低限のことしか言わない

ルークさんと共にジュエルシードとフェイト、アルフを連れて逃げた

その後もジュエルシードを探してなのは達とぶつかってほしいかっさらって行つた

恐らくそろそろゴールが見えてくるだろう

ジュエルシード残数は恐らく

氷と星と雷と

アースラ内にアラートが鳴り響く

モニターには荒れ狂う海

空から降り注ぐ雷と氷

「悠君…フェイトちゃん…」

「かなり無茶をするわね」

「フェイト・テストロツサ一人だったらかなり苦戦来るでしょうが悠がいますから動けなくなるほどの消耗は見込めないでしょう」

「意外とそうでもないかもしれないですね」

モニターに映し出されている2人の姿は危なっかしい所もあるが上手く攻撃をかわし攻撃を仕掛けている

「どういうことですか？」

「フェイトさんと悠さんには魔力変換資質があるのはご存知ですね？」

「はい。説明は悠君に魔法と出会ったばかりにされましたしユーノ君も教えてくれました」

悠の凍結変換はフェイトの電気変換と違い魔力が氷になる

質量をもった相手に対しては効果は高いが今回のような場合は水を凍らせることは出来ても一部

そもそも古代ベルカ式が近接特化とも言える魔法術式なのでミッドのように広範囲攻撃にはあまり向かない

「おいどうすんだよこのままじゃ消耗するだけだぞ！」

「確かにこのままだとジュエルシードを封印出来ても帰れるかどうか……」

仕方ないあれやるしかないかな

「砲撃するから一旦離れて！」

「アンタミッド式は使えないんじゃないのかい!？」

俺自身は使えないよ。あくまで、俺自身は

氷華の書を取り出し蒐集した魔法を読み取る

「ルークさん借りるよ。フリーズスマツシャー！」

氷華の書は夜天の書と同型のロストログア扱いされるデバイスで夜天の書と同様に他人から魔力を蒐集することで魔法を記録することが出来る

夜天の書は蒐集した対象の魔法をそのまま使用することが出来るが氷華の書は蒐集した対象の魔法を氷結系統の魔法に変換した状態で使用することが出来る

先程使ったフリーズスマツシャー

これはルーク・テスタロッサから蒐集したサンダースマツシャーを氷華の書が氷結変換したものだ

直撃した、それでも封印するには至らない

「クツツ……このままじゃ……!？」

「なのは……」

なのはとユーノが増援としてやってきたのだ

そこからは早かった

なのはがフェイトに魔力を分け与え

アルフとユーノで拘束

そこから二人揃って封印

したはずだった…

封印したはずのジュエルシードが再び暴走したのだ

「っ!?」

「な、なんで!?」

『エイミイどうなってる!? 封印はされたはずじゃあ…』

『わかんないよそんなの！みんな気をつけて！』

なのはとフェイトは封印直後

アルフとユーノは直接封印不可能

クロノはできるだろうがここまでこれるかどうかなら…俺がやるしか…

「なんだ…暴走が収まつ…!?!」

ジュエルシードがあつた場所の付近が爆発した、と思つたら

人が落ちてきてる

プラチナブロンドの髪をした

俺らと同じくらい、女の子

「まづい！」

飛行魔法で近づいてその子を抱き抱える形で落下を止める

「悠君！」

「ハルカ！」

2人が近づいてくる

「その子は？」

「分からない…ジュエルシードが暴走したと思ったら爆発して」

「っ!？」

魔力!?!しかもかなり大きい!

「全員防げええええ！」

全員が驚きながらも障壁を展開しているがジュエルシードの周りに集中して紫の雷が落ちている

「ルークさん…？いや…違うな…」

似ているが、違う

この雷騒ぎの際にフェイトとアルフはジュエルシードをかつさらい逃走
海上には俺、なのはとユーノ　そして俺に抱えられた女の子が残されていた

CROSS OVER THE WORLD

「あいつら俺を置いて逃げやがったな！」

海鳴市海上 雷が鳴り止んでそこまでしないうちに少年の叫び声が響く

その判断はあの場所では正しいものだっただろう

悠の腕の中にはジュエルシードの暴走から出現した謎の少女が抱えられていたのだから

「どうすんだよこの状況……」

悠ならば逃げるのは簡単だ

しかしそれをしない、できない理由がある

人を抱えているので海に落とすわけにも行かないし抱えたまま逃げるわけにも行かない

この少女が不安要素になっているため動けなかったのだ

「悠、一応聞いておくが投降するつもりはあるか？」

「おいおいお前、この状況でそれを言うかクロノ？」

「逃げるならさっさとすればいいがそれが出来ないからここに留まっているんだろう」

「仰る通りで」

クロノは悠と言うより抱えられている少女に目線を向けていた

「その子はどうするつもりなんだ」

「知るかよそつちで保護してよ逃げたいんだから」

早口で捲し立ててはいるが抱えている少女が心配なのか落とさないうように抱え直したりしている

「あのー状況についていけないんだけど…」

ただただついていけないのが一言発した

「なんで悠を回収しなかったんだ？」

「あの状況では仕方の無いことよ」

「そりゃああんなことがあればなあ…」

先程のジュエルシード7つの封印から回収までの様子を見ていた2人組

プレシア・テストロッサとルーク・テストロッサの2人だ

先程の雷撃はプレシアが放ったもので回収をしたのもプレシアだ

「で、あいつどうするの?」

さすがにフェイト、アルフ、ルークの3人でアースラに突撃して回収するわけには行かない

「放っておけばいいわ。既に捕まっているでしょうし」

「それもそうだが、まあなんとかなるだろ。悠だし」

正直悠なら脱走もできなくは無程度に強い

ましてやあの天才少女　なのはだったか

彼女と戦闘になっても問題なく勝てるはずだ

「随分と信用しているのね」

「まあな。血の繋がりはなくても俺の息子だからね」

「そう」

「あんたの孫だぜおばあちゃん」

「黙りなさい」

「おお、こわいこわい」

ここは…どこだろう…

たしか私はジュエルシードを発動して…
どうなったんだっけ…

「ん…」

「目は覚めた？」

え…誰…

「きやああああああああ!?!」

「うっや」

目が覚めたときに目の前に見知らぬ人がいたらそりやあ叫びますよ

そして外から叫び声を聞いたのかどうかは知らないけど走ってくる音が聞こえた
「どうしたの!?!何かあったの!?!」

あーもうなんでこうなってるの

現在医務室には

目を覚ました少女になのはが抱きつきその目の前で何故か正座させられている俺

「で、何かいいわけはある？」

「何もしてないのに正座させられていることに文句を言いたい」

「何だこの状況は？」

「それはこつちが聞きたいんだけど。」

正座をやめて改めて事情聴取をするため部屋を移動した俺たちなのだが
あの少女はともかく何故か俺は拘束されていないのが不思議だが

「じゃあ、改めて事情聴取と称して色々聞かせてもらおうか。まず名前は？」
「……」

少女は答えない、顔を下に向けて俯いて何も言わない

「あんた術式はベルカか？」

「！　なんでわかったの」

ピンゴだ

「ベルカは魔力の扱い方がミッドとは異なる部分がある。あんた変換資質持ちだろ？」

「確かに炎の変換資質があるよ」

炎か　相性最悪だな

「で、改めて名前聞くけど覚えてないのか答えられないのかどっち？」
「……」

答えない　と思ったのだが少女は語った

名前はわかる、でも分からない。と

どういふことか聞くと　こうだ

自分は元々記憶喪失で魔法に目覚めたのも偶然

ジュエルシードの事件に巻き込まれてアースラでの捜索に参加

自分の力を押さえつけている原因と自らを分離するためにジュエルシードを暴走させ気がついたら何も無い空間に

歩いていたら記憶が蘇り気を失いこの状況だったそうだ

「……………」

誰も、何も言わない

当然だ

この少女の様子から嘘ではないだろう

しかしそんな事実

存在しないのだから

「いや…まさかそんな…」

1人だけなにかに気付いた人物が居る 悠だ

「どうしたんだ悠さつきから何か言ってるが」

「とんでもないことになっちまったかもしれないぞクロノ」

悠は自分が立てた仮説を説明した

ジュエルシードの爆発は少女がジュエルシードを暴走させこちらに転移してきた時の爆発

そしてお互いに知っていることと知らないことがある

なのはヤクロノ、アースラの人物など悠と少女で共通している部分がある

「つまりどういうことなの悠君？」

「つまりだ、この少女はこことは別の次元、いや平行世界から来た。という可能性がある

んだ」

なのは理解しきれないところがあるのか、唖然としていたがクロノは深刻そうな顔をしていた

「恐らく名前がわかるが分からないというのは記憶喪失前後に名前があるからだろうか？」

「そうだよ」

かなり面倒くさいことになった

もしかするとこの先とんでもないことが起きる可能性だつてある

「じゃあまず記憶を取り戻して思い出した名前を教えてくださいませんか？」

「クレアだよ。クレア・ガーネット」

「クレアね。次に記憶喪失の時の教えて貰える？」

「美雨だよ。美しい雨って書いて美雨って読むの」

海鳴市で拾われでもしたのか？やけに日本人じみた名前だが

「苗字は？」

「月村だよ。フルネームは月村美雨」

「まさか平行世界とかスケールが違いすぎて驚いたよ」

「あのさあ」

「なに？」

今、ここにいるのは悠とクレアの2人だけ

ベルカの騎士同士ってことで2人にされたのだろう

そこは関係ない

「一応管理局に捕まってる身なんだけど、俺」

「いーじゃん同じベルカ使いとして仲良くしよーよ」

ほんとになのはの周りにいるやつはお人好ししかいないのかね

「私さ、自分が分からないんだ」

「私は月村家の美雨として生きた記憶がある。記憶だけじゃない、あそこで過ごしてた時間は確かに本物だった」

「でも記憶を取り戻してからクレアとして少しだけだけ記憶もあるしなんなら少しそっちに引つ張られてるような気もする」

「どっちが本当の自分なのかわからなくなっちゃったんだ…」

う
記憶喪失の知り合いは1人もいないので分からないが記憶喪失なりの悩みなのだろう

「だったらここから出ていけばいい」

「どういうこと？」

「一回でいいから難しいこと考えずに一から自分を見つめ直してみればいい」

「自分か少しだけわかってくると思うよ」

「そっか…あ、そうだ！」

「？」

「で、なんでこんなことに…」

「ごめんね、周りはミッド使いしかいなかったからさ」

あの話で何故かこんな状況に置かれるのはなぜなんだろうか

「じゃあこれより悠君対クレアちゃんの模擬戦を始めるよー!」

クレア曰く一回何も考えずに全力で戦ったら何かわかるかもとか言ってたんだが戦闘狂じゃないんだからさあんだ…

エイミーが開始前のルールを説明していく

どちらかがダウンするか魔力切れで決着のシンプルなルールだ
条件としては氷華の書使用禁止のみなのでそこまでハンドエのような感じはしない

「それじゃあ、試合開始ー！」

「いくよ！悠！」

「おーけやってやるよ」

「イグニス！」

「セリオン」

「セツトアップ！」

ベルカの騎士同士の開戦の火蓋が今切って落とされた

Frost Blaze

「剣とかなかなか相性悪いな」

「槍とかちよーつと相性悪いかなー」

お互い戦闘準備が完了して率直に感想を述べる

槍は剣に比べてリーチがあるだがその分先端に重さが集中する

剣はリーチは槍より短いが槍を振るえない距離まで近づいてしまえばそちらのもの
だ

といった感じでお互いに苦手な部分もあるわけでそんな感想が出たわけなのだが

「さっさと終わらせてやる」

「言つたな？」

そんなことは関係ないのだ

「まずは小手調べと行こうか」

「いーよ」

「炎弾」

「アイスキューブ」

それぞれバレットを展開して射出する

デタラメに放ったクレアに対し悠はそれを的確に潰すように直撃させる

「それならー！」

直接攻撃にでたクレアに対し悠はそのまま迎撃体制にはいる

く
デタラメではないが力強い一撃に驚きながらも一撃一撃をしつかりと対処してい

「このー！」

「なめるなー！」

クレアが剣を振るしかして来ないのは体術は使わないのか使えないのか

悠には分からないが確実になのはよりも魔法を長く使ってきたとしてもたとえその

程度

悠には対処は簡単でカウンターで蹴りを入れることも容易だ

「ちよつと女の子に蹴り入れるとか何考えてんの！」

「戦いにおいて如何に自分の手の内を見せずに相手を圧倒し無力化するか。隙が多いから仕方ないよ、あと戦闘では女でも容赦しないのは当然だろう」

ルークや地上での戦闘訓練により同年代とは強さのレベルが違うため精神的にも管理局員として犯罪者を捕まえるために甘い考えは割と消えているのだ

「こりゃ勝ち目ないな」

「始まったばっかで何を言うんだ」

あまりにも早すぎる勝てない宣言だがそれだからこそなにか仕掛けると悠は考える

実際なにかしようとしてるのはクレアだっておなじだ

「最大火力でぶっ飛ばしてやるよ」

「その一手乗った」

お互いに最大火力での一撃に了承してしまったためにアースラクルーは慌てて結界

の強化作業にはいる

実際魔力がろくに制御出来なかった時は訓練室を氷漬けにした前科が悠にはあるためだ

「カートリッジフルバースト！」

リボルバー型の銃に入っている6発のカートリッジを全弾一気にロードする

「カートリッジだと!? 同い年なのにそんな無茶を……！」

クレアには炎熱の魔力による威力上昇になのはと同レベルの魔力がある

さらにカートリッジの底上げ

対策は強くしておくに越したことはないのだ

魔力が上がるにつれて悠の髪が徐々に白く染っていく

はじめの方はメッシュのように見える程度だったが今は完全に白く染っているのに

加え髪が少し伸びているようにも見える

「ちよつとなにそれ!?!」

「なんの事」

このことを本人は知らない

そうこうしているうちにお互いに準備が完了してしまった

「轟炎斬波！」

「アブソリュート・ゼロ！」

お互い広範囲に被害が出る攻撃を放った
そんなものがぶつかり合えばどうなるかは想像にかたくない

本来ならばクレアの魔力量その他を凶るためのものだったが2つの強大な魔法の前では結界維持で精一杯で『とんでもないのが増えた』とみんなして思っていたという

ちなみに模擬戦はクレアが押し負けて敗北した

一気に魔力を上げたにも関わらずなぜ敗北したか

それは燃費の悪さだ

いくら威力を上げたとしても効果は短い

それを予想したからこそ広範囲に持続する魔法を使ったのだ

「悠、あの時のあれってなんだったの!？」

「あれ説明してよ悠君！」

「あーもうるさいうるさい」

模擬戦も終わって、クレアもまともに動けるようになってから質問されているのだが

：

「だいたいわっかんないんだよねえ…これ」

「あの時のこと覚えてないってこと？」

それは無い

あの時確かに撃ち合いをしたのだ

「多分だけど俺も何か無意識にリミッターでもかけてるとかかないかな？」

「それが一時的に解除されてああなったってこと？」

「そ、まあやる事やったわけだけど答えは出た？」

「うん、私はクレアとして生きていくよ」

「そっか」

その後管理局全面協力の元

フェイトとなのはの全てのジュエルシードをかけた全力勝負が行われた

結果はなのはの勝ち

その直後降り注いだ紫の落雷により

ジュエルシードは持っていかれた

そして俺たちは
真実を知ることになる

前に進むために

「フェイトとアルフは大丈夫か？」

「体の方はどちらも大丈夫だろうが…」

つい最近アリサの家でアルフらしき大型犬が保護されたとかでなのはが行ってみるとまじでアルフだったってということがあった

そこからアースラで保護したってんでフェイトとなのはの勝負をユーノと見てたんだが

決着が着いた上での追い打ちの落雷

そんなことがあつたんだから

「問題は精神だよなあ…」

あの一撃で場所も判明したプレシアとルークさんだがアースラの局員がいてもあの二人にはかなわないだろう

そして時は来る

『よお悠、みてるか？』

「なんだよ…あれ」

人だ、人がいる

それは問題じゃない

『お前は、疑問には思わなかったか？俺が何故プレシア・テストロッサ本人あるいはそれに繋がる何かを探していたか』

『フェイトに出会った時は本当に驚いたね。なんてったって20年近くも前に死んだ姉にそっくりだったんだから』

「あんた…何を言ってる…」

「記憶転写型特殊クローン技術…プロジェクトフェイト」

『ご名答だクロノくんまさか親がこんなことしてたとは驚きだったがねえ』

『あの時意識不明のまま目覚めない可能性があったと言われてたけどそのせいでこんなことになってるとは思わなかったけど』

『まあ、なんだ。フェイトはそこに浮かんでるアリシア・テストロッサのクローンだ』

あんたは何を言ってるんだ

アリシアってなんだよ

あんたは何がしたいんだよ

『ああ、そうだ悠。俺たちの…俺の目的は果たされたんだよ。だからさ…』

お前はもういらぬ

「っ!？」

『ルークのおかげで説明が省けたわね』

『きいているわよね？フェイト』

『あなたはもういらぬわ。どこへなりとも消えなさい！』

もう、限界だった

俺も、フェイトも

突きつけられた事実

フェイトは立っていられなくなった

おれは…ナニモキコエナイ

「ん…」

「ここはどこだ？」

「悠？起きたの？」

「フエイト？」

「…：医務室か？」

「なんでこんなところに…」

「行かなきゃ。全部、聞かなくちや」

「行くの？」

「ああ、俺もやる！」

「いこう、バルディツシユ。悠も」

「ああ、いくぞ、相棒。」

「邪魔だアアアアア！」

斬って、焼いて、吹っ飛ばして、破壊する

数が多すぎる

なのほらも応戦してはいるが数が多すぎる

「クレアちゃん！」

「なのは！」

お互いに危険が迫っていた

回避するか？ 間に合わない

防御、無理！

『Thunder rage』

その時2色の雷が降り注いだ

「お前ら無事か！」

「なのは！」

良かった間に合った

「悠！大丈夫なの!？」

「ああ、心配かけたね。なのはも」

「うん、うん！」

その時大型の機械人形が現れた

「大型だ、防御が硬い」

「うん」

「一気に決めよっか！」

「さあ、無理にでも押し通るか！」

「デイベイーン…」

「サンダー…」

「フロスト…」

「炎斬…」

「バスター…」

「スマツシャー…」

「ブレイズ…」

「一閃！」

4つの魔力が大型の防御を貫き破壊していく
もはや出てきた時の姿は跡形もない

装甲が吹き飛ばされ 帯電し 凍りつき 焼ける

「これやべえな」

「跡形もないね」

フェイトとアルフが感動の再会してたけど

「フェイト、クレア、アルフ。いくぞ」

「うん」

「ああ！」

4人は全力で虚数空間を避けながら通路を走っていた

「悠、なんでその子も来るんだい？」

「クレアのことか？」

「ああ」

あつたことないような子が重要な場面についてきてるんだから無理もない
クレアがすかさず説明を入れた

「実は私ジュエルシードのせいでこつちに迷い込んだみたいでさ」

「ジュエルシード使えば帰れるんじゃないかって思ってたジュエルシードの集まるところに
行こうってわけ」

2人は納得したのかそれ以上は聞いては来なかった

「見つけた!」

「母さん!」

プレシア・テストロツサのことはモニターでみたことがある

病気にでもなっているのだろうかあまりにも顔色が悪い

「なにを…しに来たの…」

「あなたに：言いたいことがあつてきました」

「で、お前は何しにきたんだ」

「俺はあんたに聞きたいことがあつてきたんだ」

「あの言葉…本心じゃないよね？」

「なぜそう思うんだ」

「あんたは俺とすごしてた時にあんな顔したこと無かった。それになんか悲しそうな顔してた」

「……………」

「凶星か…？何も言わないあたり恐らくは…」

「とんだ洞察力だな。あれだけでそこまで見抜くなんてな」

「じゃあ！」

「あたり 俺はお前を嫌ってなんかないさ」

「大丈夫だよ。血の繋がりはなくてもお前は俺の息子だよ」

「そう言っつて何かを投げ渡してきた」

「危険物じゃないのは確かだ」

「これ…バルディネット!？」

「ルークさんがリニスという人から送られてきたとかいうバルディネットだった」

「最後の思い出とでも思ってる、餞別だ。」

「…なにを」

「じゃあ、俺は行くよ」

ジュエルシートが円の形になり内側に膜のようなものが出来ていた

「あれ…ゲートか…?」

「…感じる、ベルの魔力だ」

「なんだと?」

「わかる。今なら、帰れる!」

「ありがとうね、悠」

「なんの事かな」

「色々だよ」

「またいつか会えたら」

「ああ 凍てつく炎にかけて」

「凍てつく炎にかけて、ね」

彼女はそのままゲートに向かっていき姿を消した

「フエイト、終わったか？」

「うん、言いたいことは言ったよ」

「なあ、大人しくこつち来てよ」

「今なら多分間に合うからさ」

「…なあ」

「もういいんだよ悠」

「お前は強い。俺は、もう要らないんだ」

「強く生きろ、悠」

もう、ダメだった

走り出しても、間に合わなかった

2人は虚数空間に落ちていった

助ける手段は ない

「悠！何する気だ！」

「離せクロノ！まだ！」

「諦めろ悠！虚数空間に落ちたんだ！もう助からない！」

「あ、ああ……」

多分、クロノあたりが何か言ってた気がする

何も分からない なにも、聞こえない

意識が無くなるのに時間はかからなかった

願いの先に

『あー撮れてるか？』

『No problem.』

『それならいいや』

『悠、お前がこれを見てるってことはおそらく俺は何かしらの原因で死んでいるだろう』

『色々言いたいことがあるんだがいぎこうしてみると何話していいかわかんないな』

『まずバルディネートだがこいつはお前が貰ってくれ。お前のためにカスタムする資金とかは用意してあるんでな』

『次の話題はセリオンのことだ。そろそろ強化改修をするしなくなってきたんだ』

『てなわけでセリオンはリンディさん経由である人に渡してもらおうように話はしてある』

『最後になるかな』

『どんなひどい別れ方をしたかもわからん』

『ただこれだけは覚えていて欲しいんだ』

『お前はどんな時でも俺の子だ』

『お前なら、大丈夫』

『強く生きろ』

『俺がなれなかつた分まで、幸せに生きてくれ』

『これで、最後だ』

『お前に送る、最期の言葉だ』

『愛してる』



ふざけんなよ…

「ふざけんなよ…」

「くっ…う、あああああああ！」

「あの…悠君は…」

「ごめんなさいねなのはさん。彼にはその…時間が必要なの」

え…どういこと…？

「どういふことかって顔してるわね。」

——彼はもう立ち直れないかもしれない

フェイトさんにはなのはさんっていう支えが出来たわ

大切な友達の

でも彼となのはさんはそこまで仲がよかった訳では無いでしょう？

魔法のことだって彼と比べればなのはさんは関わって日が浅いわけで、魔法はずっと
ルークさんや地上本部の人達が教えてくれていたの

まともに制御出来なかった時だってルークさんが

支えてくれたから折れなかったしここまで完成させることが出来た

氷華の書の運命に振り回されることがあっても自分の技術に誇りを持っていられた

唯一と言つていいほどの心の支えがなくなってしまう彼には気持ちの整理とか
色々と時間が必要なの

「だからね、なのはさん。 フェイトさん達もだけど、あの子のことよろしくね」

「はー！」

あつという間だった

はじめはさっさと終わるかと思ってた

それが予想外に手強そうなのがでてきたり

やたら対人慣れした魔導師の少女と使い魔がやって来て

それから平行世界からやってきた少女と模擬戦することになったり

多分今までで一番濃い時間を過ごしてきただろう

確かに楽しかった

新たな出会いだってあった

それでも俺は

親子として過ごす時間がもつと欲しかった

あんたともつと色んなことを話したかったし色々な場所に行きたかった

それはもう、叶わない

この広い世界には

色んな人がいて

その一人一人に

出合いがあり、別れがある

たった1人の少女が出会ったのは

魔法という名の撃ち抜く力

願いの願望器を探す中

目的を同じくする1人の少女と出会い

ぶつかり、傷つけ

それでも気持ち告げ

2人は友達になった

その過程でたどり着いた真実に揺らぐことなく

願いは時に叶わない

大切なものを失わないようにと力をつけた少年は

失いたくないと思つたものを失ってしまった

その願いの行き着く先にはきつと

誰もが望むハッピーエンドのようなものなんて
——
ない